

○村田 琴乃 氏（平成 14 年（当時 4 歳）、父を交通事故で失う）

[要旨]

当時の家庭状況

父親が亡くなったのは、私は 4 歳、弟は 2 歳、母親は 20 代後半の頃だったと思います。私と弟は、父親のことを全く覚えていません。父親のことが話題に上がることは法事以外になく、祖父やおじなど親戚に父親代わりに遊んでもらっていました。

母は週 4 日のパートで勤めに出ていました。朝、私が学校に行くのを見送った後会社へ赴き、17 時には帰宅していました。母は毎日お弁当を作ってくれましたし、部活から帰ってきた時には夕飯が準備されていて、弟と 3 人揃って食事を取ることができていました。部活や習い事も希望すれば叶えてくれ、中学生の時は、弟はテニス部、私はバレーボール部に所属していました。どちらもユニフォームや器具のメンテナンスにはお金がかかりましたが、母が工面してくれました。周りのみんなと同じように部活動をし、学生生活を過ごすことができました。

母とは、休日に他県に遊びに行くことはめったにありませんでしたが、県内の動物園や科学館や水族館、近所のスポーツ施設などに時々連れて行ってもらいました。また、よく、母と一緒に図書館に通って同じものを読み、感想を言い合いました。ディズニーランドや海外旅行に行くことはありませんでしたが、ほどよく子供らしい遊び方を経験できたと思います。母がフルタイムでなくパートで働いてくれたからこそ、子供の私たちと遊ぶことができたのだと思います。

現在、私は東京の大学に、弟は大阪の大学に通っていますが、私たちがこのように大学進学ができたのは、父の保険金や示談金による蓄えがあったからだと思います。高校生の時も、バイトはせずに部活に専念するように言われていたため、お金を稼ぐ大変さを知ったのは大学生になってからです。大学は年間 100 万円ほどの授業料がかかりますが、父からの遺産として私の口座に預かり、払っています。よくこんなに残してくれたと思います。このように蓄えがあったため、父が亡くなってからも穏やかな生活が送れたのではないかと思います。

成人して、事故の詳細を教えてもらった

弟と私が成人した後、祖父から、父がどのようにして亡くなったかを聞きました。

当時、父は創作和食の個人店をやっており、店を閉めて夜中にバイクで帰宅する途中、家から 15 分のところにある工場の搬出口でトラックと衝突したのだそうです。搬出口から出たトラックに気付かず直進して、頭を打ったのだらうということでした。

最初は、トラックとバイクの過失割合はトラックが 2、バイクが 8 でした。トラック会社は、「バイクが勝手にぶつかって来た。こちらが被害者」と主張していたそうです。母は言い返す気力がなかったもので、そのまま示談に流れるところでした。

しかしその時、祖父がプライベートで事故状況を調べ直すことにしたそうです。当時祖父は、警察本部に現役で所属していました。事故の状況を聞かされて、これはどうもおかしいと思ったそうです。事故現場やトラック会社の運営状況の調査、普段からその場所を通る人への聞き込み調査を行い、バイクの速度や運転手の勤務形態などについても調べました。聞き込みでは、いつも暗くていつか事故が起こると思っていたという証言を得ました。実際、トラックが出てくる際に光る搬出口のランプが故障で点灯していなかったり、運転手が自宅からトラックに乗って勤務ルート外で通勤しているといった問題が見つかりました。また、ぶつかったとされるトラックは連結トラックで、その連結部分に着けなくてはならないランプも、着いていないことが分かりました。

以上のことから、バイクは、トラックがあることは認識していたが連結部分が見えずその間を通ったため、頭を打ったということが分かりました。これらの証拠を改めて裁判に提出した結果、過失割合はバイクが2、トラックが8に変わりました。

また、当時担当だった警察官はとても親身で、母は救われる思いがしたそうです。NASVA のこともその警察官に教えてもらい、入会したそうです。

私を育ててくれたのは、親戚の存在

事故当時、母は無気力になっており、葬儀など全てを親戚にしてもらい、裁判も祖父にやってもらい、親戚には本当に助けられたと思います。

父の姉家族に連れられて、夏は和歌山の白浜に海水浴、冬は北海道にスキー旅行に連れて行ってもらいました。年1度、父の法事で親戚一同が集まる時にはバーベキューをしたり、お正月にはみんなでおせちを食べて夜まで遊んだり、お餅をついたり、夏はだんじりの山車に登らせてもらったり、たくさん楽しい思い出があります。今でも、私が帰省する度に親戚が集まり、焼肉をしたり食事に連れて行ってもらったりしています。お祭りが大好きでよく笑う親戚たちと一緒にいることが、とても楽しかったです。

父が創作和食店を開いた理由も、親戚たちが楽しめる店を作りたいという思いがあったと聞いています。こうして遊んでもらったり、時にはいたずらをして怒られたり、父の代わりをしてくれる人たちがいたからこそ、ここまで育つことができました。

学校での様子 本が私を救ってくれた

学校では、母子家庭だからといって特別扱いをされることはありませんでしたが、先生や友達に父のことを聞かれた時はすごく困りました。私と弟にとっては父がいなくて当たり前なのですが、父が亡くなっていることが分ると「ごめん」「かわいそう」と言われることがあり、私の家庭は謝られるような環境なのか、母子家庭であることは内緒にしなくてはならないことなのかとモヤモヤした時

期がありました。父の日に父の似顔絵を書くとき、私は分からなかったため先生にどうしたら良いか訊ねたら、答えを濁されたこともありました。

そのようなこともあり、月に1度学校に来る移動図書館が私の逃げ道でした。その司書のおじさんと仲良くなり、お勧めの本を紹介してもらうことが楽しくて本をたくさん読みました。その頃は、成績表に「本ばかり読んでいて他人とコミュニケーションをとらない」と書かれるほど、休憩時間もほとんど読書をしていました。

本に出てくる主人公たちに、とても勇気付けられました。困難にただがむしゃらにぶつかっていくのではなく、知恵をしばって乗り越えていくことや、人との関わりで成長していく様子を、本を読んで自分の中で消化していくことにより、母と弟との生活では得られない考え方や、生きるための指針を身に付けることに繋がったように感じます。

母子家庭であきらめたこともあるけれど

今思い返せば、すごく私はでしゃばり屋だったと思います。できることは自分からやるようにしていました。生徒会や応援団、委員会も経験しましたし、中学校では自治会に入り、高校では部活動の部長もやりました。何か役を得ることで、目標を達成するために他人と協力したり、知識を磨いたり、自分は普通の人と同じぐらい、いやもしかしたらそれ以上できているのではないかという自信に繋がっていると思います。

私は学芸員として就職したかったのですが、経済的な面から母を安心させたいと思い、一般企業に就職しました。自己表現については、自分の努力次第で十分に身に付けられたと思いますが、財力については限りがありました。学芸員として就職することを諦めたことは、私が母子家庭であることの唯一の心残りです。

それでも、これまでの経験を振り返ると、私は十分幸せな人生を過ごしてきたと本当に思います。